Answers

後輩輝く舞台 私が作る

女性アナの仕事 継続支援

「こだわり続けたテレビの世界も、今なら未練がないと素直に言える」

フリーアナウンサーの樋田かおりさん(37)は、女性アナウンサーのセカンドキャリアを支える「トークナビ」(東京)の社長として会社経営に打ち込む毎日を送る。

青森の民放放送局のアナウンサーを出発点に、20代の大半はテレビの仕事に従事した。業界では制作側のイメージに沿って、より若い人材が起用されていく。30代以降も活躍する先輩はわずか。「今から活動の幅を広げておきたい」と28歳でフリーの立場に転じた。

仕事を求めてテレビ番組のオーディションを受けた。契約は番組ごとが一般的で、レギュラー番組を獲得できたとしても視聴率が低迷すれば3カ月で打ち切られるケースもある。門戸は狭く、収入が家賃を下回る月もあった。

キャリアを諦めかけたある日、電車がトラブルで停車した。途中駅で降りてバス停に向かうと、家路を急ぐ人々で長い列ができていた。バス1台に乗れる人は限られる。大勢の女性アナウンサーが培ったスキルを生かせず、キャリアに行き詰まる構図と重なって見えた。

アナウンサーと打ち合わせをするトークナビ社長の樋田かおりさん（東京都新宿区）

「自分が『バス』を用意する側に回れば、年齢の壁に苦しむキャリアの在り方を変えられるかもしれない」。ふと起業のアイデアが浮かんだ。

「話す、聞くのスキルを身につけたのは先輩たちの教えがあったから。同じ志を持つ後進にバトンを渡したい」。経営ノウハウもないまま、クラウドファンディングで集めた資金を元手に2015年、会社を立ち上げた。

アナウンサーは原稿を読んで伝えるだけでなく、インタビューして話を聞くプロでもある。ビルの一室で話し方講座から始めた事業だったが、テレビ番組のナレーションや新製品の司会のほか、企業の広報活動など幅広い仕事を請け負う。

支える側に回ってアナウンサーの立場を見つめ直すことで「社会に役立てる場面は、テレビに限らず幅広い」と気づくことができ、事業の裾野が広がった。自身も社長業に追われる中で、細々と司会業などのアナウンス業務も続ける。

アナウンサーは全国のテレビ局30社を受けて勝ち取った職業で、生涯の仕事にしたいとの思いが強かった。起業するまではキャリア一筋にこだわるあまり将来像を描けていなかった。自分の意識の中で年齢の壁をつくっていたとも思う。

現在、社内には地方局などを経験した20～30代の女性らが集まり、今では委託契約を含め60人近い社員が働く。「自分一人が活躍しようと思っても輝ける舞台は限られる」。裏方に回れば、輝く人を何十人にも増やすことができることに喜びを感じる。

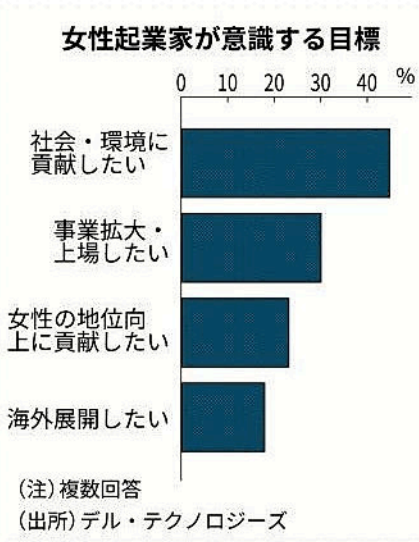
昨年、社内にいる30代の女性社員がメディアのインタビューを受けた。「今の会社があったおかげでアナウンサーを続けられました」。そばで聞いて、思わず胸がいっぱいになった。

声の魔力は放送部員だった高校時代に人見知りだった性格を変えてくれたかけがえのない存在だ。アナウンスの仕事に誇りを持つ後輩を輝かせていたい。

文　佐藤淳一郎
写真　寺沢将幸

QRコードを読み込むと樋田かおりさんのインタビュー動画を盛り込んだ電子版記事をご覧いただけます。

■ 目標「女性の地位向上」2割



IT企業のデル・テクノロジーズ（東京・千代田）が2022年8月、女性の起業家556人を対象に実施した意識調査（複数回答）によると、今後の目標として「女性の地位向上に貢献したい」を挙げたのは23・0%だった。事業を通じて女性のキャリアなどを後押ししたいとの意識がうかがえた。

最も多かったのは「社会・環境に貢献したい」（44・6%）、次いで「事業拡大・上場したい」（29・9%）。女性の地位向上が3番目だった。起業のタイミングは20代が36・3%で最も多く、7割が30代までに事業を起こしていた。

起業の時期、20代が最多

起業家の女性比率は増加傾向にある。22年11月に日本政策金融公庫総合研究所が発表した「新規開業実態調査」によると、開業者に占める女性の割合は22年度は24・5%で、10年前の12年度より8・8ポイント増えた。20年度以降は2割を上回り、調査を開始した1991年度以降で最高となった。

掲載日 2023年04月03日 日本経済新聞　朝刊 035ページ © 日本経済新聞社 無断複製転載を禁止します。